

クリエイターの視点 86

国際社会の注目を集めるビルマ(※1)。宇田有三さんの写真は、軍事政権という厚いベールの下で営まれてきた人々の多様な暮らし、その息づかいを伝える。



ビルマを南北に貫く大河イラワジ河(エーヤワディ河)を、カチン州ハモーからマンダレーまで2日かけて下る。乗降地にたどり着くと食べ物売り子が、舟に船に乗り込んでくる(11年8月、サガイン地域)

ビルマ、軍事政権に命を張って抵抗する人々。自分のすべてをそそぎこめると思った

フォトジャーナリスト 宇田 有三さん

取材歴20年、のべ滞在日数は約5年。宇田有三さんは、ビルマで取材を続けて20年になる。まだアウンサンスーチーに取材したことはない。もちろん嫌いなわけではなく、2000年、彼女が3回目の軟禁から解放された時には感動で身体が震えた。だが人づてに、アウンサンスーチーのこんな言葉を聞く。「私は一人のビルマ人にすぎません。ビルマの現実を報道したいならば、私ではなく普通のビルマの人々に会ってください」。当時、ビルマに通い始めて3年目の宇田さんは、「自分には、まだスーチーさんに取材する資格はない」と考えたという。

それ以来、タイ国境の難民キャンプや旧首都ヤンゴンから、奥のゲリラ軍基地や外部の人間の立ち入りが禁じられた辺境の少数民族が住む地域まで、ビルマ全土を取材して回った。ここまで足を運んだ人は、外国人はおろかビルマ人も少ないだろう。訪問回数は実に31回、のべ滞在日数は5年近くになる。「今は、取材というよりスーチーさんとビルマの将来を一緒に語り合いたい、そんな心境です。彼女が見ることができていない現実、伝えたいことが山ほどあるんです」

そんな宇田さんのフォトジャーナリスト人生は、92年に訪れた中米のエルサルバドルから始まった。「米ソ冷戦の代理戦争である、凄惨な内戦でした。当時私が写真を学んでいた米国に、多くのエルサルバドル難民が来ていたことから関心を深め、現地入りした際、ゲリラ兵が武器を捨て山から下りてくる停戦の場面に滑り込んだんです」

冷戦後、ボスニアやルワンダなど各地で紛争が起きていたが、双方に正義がある民族紛争や宗教紛争は、自分のテーマではないように感じていた。そんな時、世界で一番古い内戦といわれる、ビルマのカレン民族独立闘争を知る。「軍事政権に命を張って抵抗している人々には、非常に共感できた。フリーのフォトジャーナリストとして、自分のお金と時間とすべてを注ぎ込めると思っ



国民民主連盟(NLD)のシラホルマーク、闘う孔雀の刺青を入れたウインミンさん。9年ぶりに再会、顔を出しての撮影に応じてくれた。(12年4月、マンダレー管区)



中国の支援によって作られたビルマ最大の橋は、東部サルウィン河をまたいでバゴー管区とモン州を結ぶ。その橋ができるまで、人々は通船で両地域を行き来していた。船が岸に着くとバイクタクシーに乗って家路を急ぐ(05年、モン州)



ビルマ国内で最強の武装抵抗組織闘争を率いてきたカレン民族同盟(KNU)のホー・ミャ議長が死去した。葬儀の日、議長の家族が参列した(06年12月、カレン州)

たんです。鳥の目をもって空の上から地球を俯瞰し、蟻の歩みでもって地上を這い、人々の暮らしを自分の肌で感じる”



夜明け直後の難民キャンプ 声を出して学習に励む女の子(03年、ビルマとタイ国境)

の軍政下に生きる人々を取材する計画でした”
それは、想像を絶する過酷な日々が始まりだった。ビルマ国内のカレン族避難民を訪ねた時

は、戦闘地の間を縫って密林の中を何日も歩き通し、「国内避難民」の姿を国外に伝えた世界初のジャーナリストとなった。
写真は言葉を超える
外国人だからできること

ビルマは、いくつもの民族、歴史、宗教、文化が何層にも折り重なる国だ。従来の民族分類は役に立たず、勉強すればするほど、それまでのものの見方が揺さぶられてくるという。誤解されがちなこの国の実情を文章で伝える一方で、「一枚の写真は言葉を超える」とも感じている。

「写真を撮る時は非常に意識的です。何を見ているのかが問われる。たとえばビルマでは女性は頭に荷物を載せて運び、男性は肩に担ぐ。街のポスターを見てみると、手にビールなんかを持っていると、手には必ずジュースです。公の場で女性がお酒を飲むのは、まだはしらないとされているんですね。そういう「フォトアイ」を自分の中にどれだけでもてるか、毎日が自分への挑戦です」

ほんの少し前までビルマでは、宇田さんが一枚の写真を撮ることで、撮られた人が逮捕される可能性さえあった。今は逆に、現地のメディアが堰を切ったように情報発信を始めている。そんな中で外国人がすべきこと、できることは何か、自分に問い

続ける日々だ。
「たとえば、03年に起きたディペーイン事件(※2)の現場には、今も地元の人が入ることができないんです。外国人なら行って調査できるかもしれない。最悪でも国外追放です」

今年の3〜4月の取材では、以前は顔を隠し匿名でスーチーさん支持を語っていた人との再会があった。

「研究者を含めビルマにかかわる人の中で、今の展開を予想できた人は一人もいませんでした。これからどうなるのか本当にわからないですが、ただ、この変化はもう後には戻らないでしょうね。1年間ビルマに暮らして取材したことがあるのですが、滞在中のゲストハウスのドアをいつノックされるかというストレスで、最後の1カ月は毎日下痢していました。それを思うと、自由というのは本当にありがたいものだなと感じます」

ときどき「なぜビルマのことしか見ない? 日本にも大変な問題があるのに」と言われることがある。東日本震災の時は迷いもあったが、「自分が今やるべきことをちゃんとやろう」と腹をくくった。一つのテーマを突き詰めていくと、そこからあらゆる問題に共通する矛盾が見えてくるという。

この夏はバン格拉デシュ国境で、ビルマ社会の差別構造の最底辺に置かれた口ヒンギャと呼ばれる人々をじっくり取材する

予定だ。
「大変だけど、おもしろい国です。ここまでできたのだから、もうしばらくかわらうかなと思ってますよ」
③ (植田君子)

※1 89年、軍事政権は英語の対外呼称を「バーマ」から「ミャンマー」へ変えた。この記事では、それ以前に日本語として定着していた「ビルマ」で統一
※2 03年5月30日、2回目の自宅軟禁から解放されたアウンサンスーチーが地方遊説に出た際、ディペーイン市郊外で集まった支持者らが軍政側に襲われた事件。犠牲者6180人ともいわれるが、真相はいまだ一切不明。

うた・ゆうぞう
1963年、神戸生まれ。教員を経て89年渡米。ボストンにて写真を学んだ後、エルサルバドルを皮切りに軍事政権、先住民民族、世界の貧困などを重点取材。95年神戸大学大学院で国際法を学ぶ。平和・共同ジャーナリスト基金奨励賞、黒田清一郎賞、新入賞。ほか、ウェブサイトでビルマ関連の精羅字テキストも公開中。www.yuuzou.net



開ざされた国ビルマ カレン民族闘争と民主化闘争の現場を歩く (高文研)



「ビルマ 軍政下に生きる人びと」(企画・編集:財団法人アジア・太平洋情報人権センター 解放出版社)

THE BIG ISSUE

ホームレスの仕事をつくり自立を応援する

JAPAN

日本版

197号
2012.8.15



スペシャルインタビュー
ダライ・ラマ14世

特集

転換の時代、生きる知恵の渚を洗う55冊

300円のうち、160円が販売者の収入になります。

300円